

妻よ子よ待て

(現地自活)

これらは、前に掲げた二首につづいての作品である。

壮士時(をさかり)の子の四人をば戦ひに征かして
より老いましむ父
老い給ふ父のかたへに遠く征でし子の一人だには
や帰らしめ
東京にとどまりたらむわが父の生死聞き得む日は
いつならむ
生死さへ知らぬ妻子も健かにありとしせねば思ふ
に堪へず
昨夜(きそ)の夜の夢に見えたる妻子らの微笑む顔
を心に恃む
(野草)

海藻を拾ふと磯に立つ兵の夕日に照れる裸形衰ふ
独りあらば狂ひ死ぬべきひもじさと思へど堪ふる
共に堪へつつ
雑炊にまじれる粒の一粒も丹念に食ふ噛みわけな
がら
再びを遭ひがたき世に生きてわれ飢えて死なむか
南の島に
(野草)

戦ひに征でて来しより明けくれはわが学問に遠き
日なりき
一冊の書さへ読まずて久しきを衰へにけむわが読
書力
生得の愚かさ嘆け生涯をかけむわが道ひそかに思
ふ
還らむ日いつとは知らぬ学問に寄する思ひの湧き
立ちゆらぐ
(わが道)

家ぬちに父のをらねば童らもおとなしくむ童さ
びして
雛一つ祝はざりしを時に悔い見ずて久しき吾子を
しぞ思ふ
男の童病みたる後はよく拗ねて泣きつづけるしう
しろ姿よ
ただ一目見しのみなりし末の子は臍氣にだに顔も
浮かばぬ
四人の子一人死なして戦ひに征で来て思ふ殊にそ
の子を
(子らを)
暁の夢に見えしは玉の緒の絶えなむとして苦し
ます母
死に給ふ母とは思へ傍らに侍る日われに多からざ
りき

(母の命 昭和18年4月4日母病死。われ応召して横須賀重砲兵聯隊補充隊に勤務中なりき。その前後を)

秀歌は多い。しかし紹介すべき紙数がない。復員の期待とよるこびとの歌百三首の中から数首抄して、この紹介を終へよう。くりかへしていふ、この歌集は、飯田先生の、人として、学者として、歌人としての、こよなくたふとい人間の記録であると。心から必読をおすすめする。

ほの暗き改札口に手を振るは妻にあらずやまさしく妻なり

暁の駅に下り立ちたまきはる命生きたる妻と相見つ

生死すら知らざりし日も妻子らに会へむをわれは疑はざりし

幼らの眠れるすがた蚊帳越しに見てはおどろく背丈の伸びを

妻が灯すみあかししろく揺れ立てり暁ちかき風の流るる

朝覚めてわれを見出でし幼らの笑みては見するそのはにかみを

諸手つきて朝の挨拶する吾子に涙にじみてうなづきかはす

(6月29日字品に上陸、復員。家族の所在明らかかなど、一路妻の郷里に向ふ)

焼跡の畑に立つは父なりき見ても疑ふその老いまずに

(父は、第一家とともに東京にありき)

(謄写タイプ刷B 6版 248頁 発行所 大阪府吹田市千里山484 関西空穂会 昭和40年8月15日刊 定価600円)

Arthur Hedley; Selected Correspondence of Fryderyk Chopin と邦訳について

佐藤允彦

未だに毎年2、3冊は、ショパンの新しい本が出る程ショパン・ラッシュが続いている。これまでショパンの伝記・研究書といえば、Frederick Niecks; Frederic Chopin as a Man and Musician や Edouard Ganche; Frederic Chopin: sa vie et ses oeuvresの有名な二著を想い出す人もあるかも知れないが、ショパン研究についてはもはや完全に二十世紀で、伝説や寓話の類は、その立場を失くしてしまい、ガンシュ、ニークスの二著は、さしずめ古典といったところである。ショパンの書簡集では M.Karasowski; Life and Letters of Chopin と Henryk Opieński; Collected

Letters of Chopin が一番有名であろう。カラソフスキのものは「ショパンの生涯と手紙」、(柿沼太郎訳、音楽文庫,) オピエンスキのものは「天才ショパンの心——ショパンの手紙」、(原田光子訳、第一書房) となって邦訳されており、第二次大戦後1955年、ワルシャワのショパン協会の編集した「ショパン書簡集」二巻 Korespondencja Fryderyka Chopina (Panstwowy Instytut Wydawniczy 1955) I 583pp. II 606pp zł. 97. 40 が出版されるまでは、代表的な書簡集であった。カラソフスキの書簡集は、1877年ドレスデンで発行され、その後ポーランド語と英語に翻訳されている。柿沼氏の訳は、恐らくドイツ語の原典に依られたものと思うが、オピエンスキの英語版と共に完全な書簡集ではない。カラソフスキ、オピエンスキの個人的なショパン像が強く出ており、伝記としても間違っただ点が多いのは既に研究者の間で指摘されている通りである。

ショパンの手紙は、ポーランド語とフランス語の二種類に分けることが出来る。ポーランド語のものは、パリ以後にも多く、同国人との間に書かれ、生国の言葉だけに表現にも彼らしい冗談や会話体がそのまま生きて、実に個性的な味がある。それに反しフランス語は、如何に父親がフランス人でフランス語に早く親しんでいたとはいえ、所詮外国語の域を出てはいない。二国語を用いて書かれた書簡集を作る上で、最難の問題はポーランド語という、いとも厄介な言葉が使われていることで、このためにポーランド語から独語又は英、仏語に翻訳される時に、沢山の誤訳が自然に生れたのも無理はない。実際、ショパン協会編の書簡集の中にも、沢山難解な表現があって謎めいており、アプレのポーランド青年に尋ねてみても、サテと首をかしげることが多かった点からみて、彼の書簡の翻訳がどれ程難しく、大事業であるか判るであろう。その上、ポーランドには西欧にない独得の風俗・習慣があって、これを理解しながら各国語に翻訳することは、至難の業といわねばならない。

Arthur Hedley; Selected Correspondence of Fryderyk Chopin (William Heinemann Ltd. 1962) 375 pp+25 pp は、ポーランド語のショパン書簡集と違った意味で、恐らく後世に残る名著であることは疑いない。著者ヘドレイ氏の名は、Grove's Dictionary of Music and Musicians のショパンの項の執筆者で、“Chopin” Master Musician Series (J. M. Dent & Sons Ltd., 1947) 176 pp+38 pp のショパン研究書があり、早くからその名を知らされていた。計らずも、本年行われた第7回ショパン・コンクールの際にお目に掛ることができ、食事を共にしながら多く教えて頂くことが出来、非常に幸せであった。ヘドレ

イ氏はフランス文学をソルボンヌで研究し、学位を取られた後帰国、ショパンの研究を始められてからポーランド語の必要性を痛く感じたため、ポーランド語の学習にふみきられたそうである。幸いにもロンドンには、数万人のポーランド人やポーランド系の人が居住していたために、彼等に教えられたり、数度ポーランドに赴いて研究された。それが非常に役立ち、今はポーランド人と交わらない程流暢なポーランド語を話されるし、ショパンの書簡の翻訳に Sydow と共同作業を始められた由、その間の苦心談などお互いに外国人がポーランド語を勉強する際に感じるあの苦痛を話しあった。

ヘドレイ氏の書簡集は、確かにユニークで後世に残る名著であろう。序の中で述べているように、この書簡集は英国人のために訳されたのが第一の特徴である。ポーランド人の独得の表現法や余り必要でない内容は思い切ってカットしたり、彼の生涯と音楽活動を知るのに最少限度の必要を生じるもの以外は、書簡集に取り入れられていない。原文でショパンはふざけたり駄洒落を使ったりして読む者を困らせているが、それも思いきってカットされている。カラソフスキやオピエンスキの著書の中では、書かれた時期が判らないままにカッコの中に「……であると思う」とされていたような面も、最近のショパン研究の成果をとり入れて日付も完全である。第二に、ヘドレイ氏は、この著書を単なる書簡集でとどめず、「全生涯の動きを、手紙で大体一貫した物語りとして読めるように」まとめあげている。往復書簡を中心に置いて、手紙と年代の間に短かい解説をはさみ、心にくいばかりにその意図を成功させている。ショパンの文献ではコルトーの Aspects de Chopin がユニークな著書であるが、方法は違っていてもショパンの人間像を造り上げる上で、大変面白く、カラソフスキやオピエンスキのものとは比較にならない史実に対する忠実さをみせている。更に、もう一つ注意すべきことは、ポーランド判にもないショパンの弟子 Joseph Filtsch の手紙や George Sand の第三者宛の手紙なども含んでいることで、パリ時代のショパンを知る上では非常に貴重であるばかりか便利である。殊にフィルチの手紙は、ヘドレイ氏の自慢のものもあり、こうした第三者の手紙の内容に依り、ショパン像を客観的に浮き出させようとしている辺りに、ヘドレイ氏の研究態度の一端がうかがえる。又、今では完全な似物として葬られている Delpchin Potcka の手紙に触れ、似物であることを看破る迄の彼の苦心を語り、マッカな似物であると痛烈に非難している。ポトツカの手紙は、1945年に発見されたもので、Casimir Wierzynski; The Life and Death of Chopin 「ショパン」(野村光一、野村千恵共訳、創

書

元社刊)の中に多く取り入れられているが、若しその手紙が真物であるとすれば、ショパンの作品に大きな註が入る可能性のあるものだけに、ヘドレイ氏の研究は実に貴重なものになっている。

この本の邦訳が進行中であることを、ヘドレイ氏からワルシャワで聞いた。そして、繰返し繰返しこの本が日本で理解されるかどうか心配されていた。というのは、もともと英国人のために書かれたもので、翻訳の時にポーランド語の表現を英国人に判るように、英語独得の表現に置き換えた点が沢山あるからである。小松雄一郎氏の訳は、多少読みにくい点もあったが、成功であろう。然し惜しむらくは、地名、人名に読み

評

違いが多く、フランス語の面にもポーランド語の方にも多々見受けられる。殊にあとがきの中で、ポーランド人の名前、地名の読み方は、ポーランド大使館員の助けを借りたと、断つてあるにも関わらず、誤読の多いのは今迄の邦訳を参考書に使われたためと考えられる。例えば、スザファルニアという地名が多く出てくるが、Szafarnia シャファルニアであり、野村氏の訳にも同じ誤りがある。この程度のことは許される範囲かも知れないが、目茶苦茶に読まれてきた人名や地名を、此の際完全に読んで過去の過ちを訂正すべきだと思う。